

東京藝術大学 美術研究科 芸術学専攻 西洋美術史

2021 年度 博士学位論文

ジャン・ロレンツォ・ベルニーニと17世紀の「死」のイメージ

～本文編～

学籍番号 1315929

荒木 智子

ジャン・ロレンツォ・ベルニーニと 17 世紀の「死」のイメージ

## 凡例

- 1 単行本、雑誌の書名の場合は『 』、論文の場合は「 」で括り、作品名は《 》キリスト教の主題等は「 」内に記した。
- 2 短い引用、概念等は「 」内に示した。
- 3 文献は巻末の書誌情報に記されたものの省略形を用いて表記される。
- 4 翻訳部分において〔 〕は、執筆者による補記・補註を示す。( )がある場合は、原則として原文の形式を踏襲している。
- 5 固有名の日本語表記は原音を尊重したが、慣例優先の例外もある。聖書関係のものは新共同訳に依拠した。
- 6 特に明記のない翻訳部分の訳文については、全て執筆者による。

## 目次

### ジャン・ロレンツォ・ベルニーニと17世紀の「死」のイメージ

序章	本稿の目的 .....	5
第1章	「往生術」と「死」の再来 .....	9
	「往生術」の復活: サヴォナローラからベッラルミーノへ／「往生術」の復活: Buona Morte の設立／「死の像」の復活:ローマの墓碑とベルニーニ/ ローマの諸教会:他作家による「死」のイメージ	
第2章	「死」のイメージの発展とローマの情勢 .....	21
	「死の像」と2人の教皇:ウルバヌス8世とアレクサンデル7世の墓碑/ ペストの再来と2人の教皇／「死」のイメージと解剖学史	
第3章	素描《キリストの血》 .....	43
	はじめに／素描《キリストの血》概要:先行研究と問題の所在／制作の契機1: 伝記と書簡／制作の契機2:マリア・マッダレーナ・デ・パッツィの列聖/ 「血の海」のモチーフ:脇腹から流れる血と水／結語	
第4章	最後の《救世主キリスト》 .....	68
	父と子の共作《救世主キリスト》:トスカナ様式のキリスト像/ 晩年の《救世主キリスト》:来歴とローマの《救世主キリスト像》／初期キリスト教時代 の遺跡と17世紀のローマ／最後の「往生術」としての《救世主キリスト》	
終章	.....	92
文献リスト		

## 序 章

## 序章

アルベルト・テネンティは 1951 年の『アナル： 経済・社会・文明』(*Annales. Economies, Sociétés, Civilisations*)に寄稿した「往生術」(*Ars Moriendi*)の中で以下のように述べている。

死に関する感情についての研究が重要な成果をもたらすことはまったく疑いの余地はない。とりわけ、16 世紀に関して、あるいはより広く言えば、1450 年から 1650 年の時期に関してはそうである。たしかに、この時期がもつばら遺骸によって特徴づけられるわけではない。しかし、この 200 年を通じて、死が美術や文学、実践活動、さらには経済においてもつねに存在していたのは事実であり、このことはきちんと説明されなければならない。そこにはさまざまな態度の違いがあり、結晶化のような漸進的な変化や古い態度への回帰がある。そして態度決定の多様性はつねに一つの定点、つまりあの世と死という点に関わっている<sup>1</sup>。

美術とは人間活動のひとつであり、それ故に社会の動勢から切り分けて考えることはできないのであるが、17 世紀のイタリアではその殆どがキリスト教、カトリックの精神の一側面と言ってよいものであった。とりわけ、彫刻家ジャン・ロレンツォ・ベルニーニは、対抗宗教改革以降のイタリア、ローマの街においてカトリックの精神性を具現化するのに務めた最大の功労者の一人と言っても過言ではないだろう。自身が語るように、ベルニーニは「人生を通して、教皇や王侯君主のために制作を捧げた」ため<sup>2</sup>、その作品には彼らの意向が色濃く反映されている。1598 年 12 月 7 日に生まれ、1680 年 11 月 28 日に 81 歳で亡くなるまでに、教皇庁ローマでは 10 人の教皇が生まれ、そのうちウルバヌス 8 世に始まる 6 人の教皇と密接に関わって制作に携わった<sup>3</sup>。当然、彼らの周囲には枢機卿や名だたる神学者達、また彼らを取り巻く王侯貴族を含めた 17 世紀のカトリック界の中心人物達が幾重にも広がっていた。この点において、ベルニーニは工房を束ねる制作者ではあったが、彼があくまで一般的な職人ではなかったことは明らかである。モルマンドが彼の当時の経済状況を現在の貨幣価値に照らし合わせて検証したように、現在でも有名なボルゲーゼ美術館の《アポロとダフネ》を完成させた 27 歳にして、既に 1000 ス

---

<sup>1</sup> A. Tenenti, “Ars Moriendi”, *Annales. Economies, Sociétés, Civilisations*, 1951, 6<sup>e</sup> année, no. 4, pp. 433-446. 日本文は、以下より引用: テネンティ[著]、池田祥英[訳]、「第 9 章 往生術—15 世紀末における死の問題に関する覚書」(1951 年)、エマニュエル・ル＝ロワ＝ラデュリ、アンドレ・ビュルギエール[監修]、浜名優美[監訳]、『叢書 アナル 1929-2010 —歴史の対象と方法』、第 2 巻、東京、2011 年、219 頁。

<sup>2</sup> C. D’Onofrio, *Scalinate di Roma*, Roma, 1974, p. 52-53; S. Fraschetti, *Il Bernini, la sua vita, la sua opera, il suo tempo*, Milano, 1900, pp. 420-422; F. Imperato, “Documenti relativi al Bernini e a suoi contemporanei”, *Archivio storico dell’arte*, III, 1890, pp. 136-143.

<sup>3</sup> ベルニーニが生きている間、10 人の教皇が登位した。ベルニーニは、ウルバヌス 8 世(在位: 1623-1644)の死後、インノケンティウス 10 世(在位: 1644-1655)の時代には、冷遇されもしたが、その次のアレクサンデル 7 世(在位: 1655-1667)は、再び彼を重用した。

クーディを報酬として受け取っていたし、1680年に81歳で死去した際の遺産は、「控えめに言ってもおよそ30万スクーディ、つまり21世紀のアメリカ・ドルに換算して約1200万ドルに相当した」<sup>4</sup>。「17世紀前半の教皇庁の歳入は平均しておよそ150万スクーディ」というから<sup>5</sup>、当時のローマにあってベルニーニがどのような立場にあったかを想像することは容易である。ベルニーニ自身、「高貴な生まれであればあるほど、崇高な美德を有していることが多いものだ。このような事は、庶民にはまず滅多にみられない事である」とパリ滞在時にシャントルーに語っていることから<sup>6</sup>、本稿で言及するキリスト教的精神とはイタリアやローマにおける一般的な市民の間でのそれではない、という点についてはまず理解しておく必要がある。数多の教皇や貴頭に仕えたベルニーニの作品をクロノジカルに見ることは、必然的にバロック期のイタリアやカトリックの精神の帰趨を見ることに他ならず、彼が制作した死にまつわる墓碑や頌徳碑を概観することで、17世紀の「死」の問題について一定程度の視座を与えることができるのではなかろうか。また、歳若く成功し順風満帆に時代を謳歌した芸術家が、自身の「死」に直面するまでどのように生き、どのような作品が生まれたのかについて美術史的な観点から語られることは、図像と倫理という観点から個人の「生」について考える上で意義深いことであると考えられる。「『死』を見つめることは、とりもなおさず『生』を見つめること」であり<sup>7</sup>、美術史的な観点から「死」にまつわるイメージとその成立の背景を整理することで、ベルニーニの生きた17世紀の精神史について検討したい。この図像と倫理という観点から「死」を捉えるということについて、いみじくもテネンティが「盲人踊り」の以下の一節を引用している。

人は言う。この生にはこの死ありと……そのためには  
生きながら死なねばならぬ  
そして死にながらよく生きるためには  
その死を記録しなければならぬ<sup>8</sup>

---

<sup>4</sup> F. Mormando, *Bernini. his life and his Rome*, Chicago, 2011, pp. xvii-xix. 引用箇所の日本文に関しては以下より抜粋: モルマンド[著]、吾妻靖子[訳]、『ベルニーニ その人生と彼のローマ』、東京、2016年、xi-xiv頁。

<sup>5</sup> 前掲註3。

<sup>6</sup> P. F. Chantelou, *Journal Du Voyage Du Cavalier Bernin en France*, Paris, 1885, p. 177. (9月23日の日記)

<sup>7</sup> 小池寿子、『死を見つめる美術史』、東京、2006年、15頁。

<sup>8</sup> Tenenti, *op.cit.*, pp. 433-446. 日本文は、以下より引用: テネンティ[著]、池田祥英[訳]、前掲書、221頁。尚、この原文については、Michault, *Danse des Aveugles*, Bréhant-Louedac, vers 1485 が註に指示されている。1884年版が以下で参照可能である(2022年03月時点)。

<https://play.google.com/books/reader?id=Q1GuZvh2D8EC&pg=GBS.PP88&hl=ja>

また「盲人踊り」については、以下の論文に詳しい: 小池寿子、『『盲人たちの舞踏』(Danse aux Aveugles)における「牛に跨る死」を巡って—中世後期における死の受容—』、『國學院雑誌』、第122巻、3号、2021年。

本稿の目的は、17 世紀のイタリア・ローマを生きたジャン・ロレンツォ・ベルニーニによって作品の中に記録された「死」のイメージを編年順に精査することで、17 世紀のローマに再び生まれ、墓碑彫刻として現れた「死」のイメージに対する熱狂と、キリスト教的精神史や史実としての社会背景との関わりを明らかにする事である。

## 第 1 章

出版予定

## 参 考 文 献 一 覽

出版予定  
(一部削除)

**【欧文】1次史料**

**ALBERTI 1604**

ALBERTI, Romano, *Origine et progresso dell'Academia del Dissegno, de pittori, scultori, et architetti di Roma*, Pavia, 1604.

**BAGLIONE 1642**

BAGLIONE, Giovanni, *Le Vite De' Pittori, Scultori Et Architetti dal Pontificato di Gregorio XIII Del 1572 in fino a' Tempi di Papa Urbano Ottavo nel 1642*, Roma, 1642.

**BALUDINUCCI 1682**

BALUDINUCCI, Filippo, *Vita del Cavaliere Gio. Lorenzo Bernino*, Firenze, 1682.

**BARTOLI 1652**

BARTOLI, Daniello, *Della Vita del P. Vincenzo Carafa della Compagnia di Gesù*, Roma (& Bologna), 1652.

**BARTOLI 1825**

BARTOLI, Daniello, *Dell'Istoria della Compagnia di Gesù. IL GIAPPONE. Seconda parte dell'Asia*, 1825.

**BASSANI 1700**

BASSANI, Antonio, *Viaggio a Roma della Serenissima Reale Maestà di Maria Casimira, Regina di Polonia, vedova dell'Invittissimo Giovanni III per il voto di visitare i Luoghi Santi et il Supremo Pastor della Chiesa Innocenzo XII (...)*, Roma, 1700.

**BAELLARMINO 1620**

BELLARMINO, Roberto, *De Arte Bene Moriendi Libri Dvo*, Roma, 1620.

**BERNINO 1713**

BERNINO, Domenico, *Vita del Cavalier Gio. Lorenzo Bernino*, Roma, 1713.

**BOSIO 1632**

BOSIO, Antonio, *Roma sotterranea*, Roma, 1632.

**CARDIM 1646**

CARDIM, Antonio Francisco, *Fascicvlvs e Iapponicis floribvs svo adhvc madentibvs sanguine*, Roma, 1646.

**CASTELLI 1700**

CASTELLI, Paolo, *Il giorno Pasquale rettamente assegnato nel Calendario Gregoriano. Si nel secolo decorso 1600. Si nel presente 1700. Si negli altri avvenire. Difeso contra l'impugnazione de' moderni. Dedicato all'cardinale Panfili*, Venezia, 1700, p. 493

**CEPARI 1669**

CEPARI, Vilgilio, *Vita della serafica vergine s. M.M. de' P. fiorentina... con l'aggiunta cavata da' processi formati per la sua beatificazione e canonizzazione dal padre Giuseppe Fozi*, Roma, 1669.

**【欧文】2次史料**

**ANGELINI 1998**

ANGELINI, Alessandro, *Gian Lorenzo Bernini e i Chigi tra Roma e Siena*, Siena, 1998.

**ANIELLO 2007**

ANIELLO, Barbara, “L’Iconografia dell’estasi”, *Op. cit. selezione della critica d’arte contemporanea*, no. 130 (settembre 2007), pp. 25-42.

**ARGAN 1954**

ARGAN, Giulio Carlo, “La Rettorica e L’arte Barocca”, *Lettere Italiane*, Vol. 6, No. 3 (Luglio-Settembre 1954), pp. 257-264.

**BACCHI 1996**

BACCHI, Andrea (ed.), *Scultura del’600 a Roma*, Milano, 1996.

**BACCHI 2008**

BACCHI, Andrea, HESS, Catherine, and MONTAGU, Jennifer (eds.), *Bernini and the Birth of Baroque portrait sculpture* (exh. cat.), Los Angeles, 2008.

**BACCHI 2016**

BACCHI, Andrea, *Pietro and Gian Lorenzo Bernini. Bust of Savior*, New York, 2016.

**BACCHI 2017**

BACCHI, Andrea and COLIVA, Anna (eds.), *BERNINI* (exh. cat.), Milano, 2017.

**BAILEY 1999**

BAILEY, Gauvin Alexander, *Art on the Jesuit missions in Asia and Latin America 1542-1773*, Tronto, 1999.

**BAILEY 2005**

BAILEY, Gauvin Alexander. and JONES, Pamela M. (eds.), *Hope and Healing. Painting in Italy in a time of plague, 1500-1800*, Chicago, 2005.

**BAKER-BATES and PATTENDEN 2015**

BAKER-BATES, Piers and PATTENDEN, Miles (eds.), *The Spanish presence in sixteenth-century Italy: images of Iberia*, Farnham, 2015.

**BARKER 2003**

BARKER, Sheila, *Art in a time of danger. Urban VIII’s Rome and the plague of 1629-1634*, Columbia University, 2003. [dissertation]

**BENIVIENI 2003**

BENIVIENI, Domenico, GARFAGNINI, Gian Carlo (eds.), *Trattato in Difesa di Girolamo Savonarola*, Firenze, 2003.

**【和文】 2次史料**

**飯田 2012**

飯田巳貴、「近世におけるヴェネツィア共和国とシリアの輸出入貿易：1592-1609年」、『専修大学人文科学研究所月報』、258号(2012年、7月)、1-17頁。

**石瀬 2009**

石瀬博、死生学研究編集委員会[編]、「キリスト教的アルス・モリエンディの一断面 ルターのアルス・モリエンディを起点として」、『死生学研究』、12号(2009)、49-73頁。

**小池 1994**

小池寿子、『死者のいる中世』、東京、1994年。

**小池 1995**

小池寿子、『マカーブル逍遙』、東京、1995年。

**小池 2004**

小池寿子、「腐敗と救済—スペクタクルとしての死体と腐敗」、小菅隼人[編]、『身体医文化論 III 腐敗と再生』、東京(慶應義塾大学出版会)、2004年。

**小池 2006**

小池寿子、『死を見つめる美術史』、東京、2006年。

**小池 2008**

小池寿子、「ヨーロッパ美術に見る善生善死」、『日仏医学』、31巻、1号(2008年11月)、34-41頁。

**小池 2010**

小池寿子、『死の舞踏への旅 踊る骸骨たちをたずねて』、東京、2010年。

**小池 2010**

小池寿子、「身体をめぐる断章 その16 ～血液の神秘～」、『SPAZIO』、no. 69、2010年。  
(<https://www.nttdata-getronics.co.jp/csr/spazio/spazio69/koike/index.html>)\*2022年03月時点

**小池 2021**

小池寿子、『『盲者たちの舞踏』(Danse aux Aveugles)における「牛に跨る死」を巡って—中世後期における死の受容—』、『國學院雑誌』、第122巻、3号、2021年。

**加藤 1999**

加藤健次、「自然という不自然:バロック的〈死〉の表象と人体解剖図」、『フランス文学』、22号(1999年)、47-56頁。

**河原 2014**

河原温、池上俊一[編]、『ヨーロッパ中近世の兄弟会』、東京、2014年。

**土居 1989**

土居満寿美、「ペトラルカの詩的空間の構造『カンツォニエーレ』と『トリオンフィ』の対比において」、『イタリア学会誌』、39巻、1989年、197-219頁。



## 謝 辞

本研究は、筆者が東京藝術大学美術研究科大学院博士後期課程在籍中に行われました。執筆に際し、学部生の頃よりご指導頂いている同学西洋美術史研究室の越川倫明教授にご指導を賜りました。

本研究にあたりイタリアに留学した際には、世界的な Covid-19 の感染拡大の影響を受け、ローマの研究所や美術館、図書館が全てロックダウンにより閉鎖され、研究活動の中断を余儀なくされました。そのような中にあっても、越川先生は常に研究の方向性を示して下さるのみならず、根気強く精神的な支柱として導いて下さいました。常に至らぬ事でご心配をおかけしたことを、ここに深謝すると共に、この場を借りて深く感謝を申し上げます。まだまだ道半ばではございますが、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

本稿の査読にあたり、主査の越川先生をはじめ、本学より副査として田邊幹之助教授、佐藤直樹教授よりご指導を賜りました。田邊先生、佐藤先生には、学部生の頃よりご指導頂き、折に触れ研究に対し貴重なご助言を賜ったこと、大変感謝申し上げます。

また副査として、國學院大学文学部哲学科より小池寿子教授にご指導を賜りました。学部生の頃に小池先生の御著書に感銘を受けて以来、博士論文で先生に副査をお願いできましたこと、大変光栄に存じます。ここに深く感謝申し上げますと共に、改めまして今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

ローマでの留学は災難に見舞われたものの、ローマという街、そしてそこに今も尚遺された芸術についてより深く知るための入り口に初めて立てたような素晴らしい体験となりました。留学に際し、公益財団法人 石橋財団様にご支援を賜りました。ここに記し、厚く御礼申し上げます。また、困難に満ちたローマでの生活を始まりから終わりまで、あらゆる面で支えてくれたイタリアの敬愛する友人たち Ludovica Gioffrè と Vittoria Bellato にも感謝致します。

博士論文を執筆する際には、東京藝術大学の研究室の皆様にも大変お世話になりました。とりわけ学部・修士においては同期でもあり、論文執筆時には同学の教育研究助手でもあった山本樹さんには、難解な 17 世紀の神学者によるイタリア語を解読する際に多く助言を賜りましたこと、ここに感謝申し上げます。

2022 年 荒木 智子